

熊本県に、日本に、南阿蘇から自分の考えを発信してみませんか？

例年なら夏休みを今週から迎えている時期です。この時期には小、中学生に対して絵画であったり、習字であったり、作文であったり、創作物であったり、いろいろな応募があります。夏休みの宿題として取り組むこともあります。今年もいろいろな応募があっていますが、夏休みの期間は短いですがチャレンジしてみてはいかがでしょうか？みなさんの中学生らしいみずみずしい感性を社会に発信してみませんか？（入賞した人にはすごい表彰がある募集もあるようです。）

今年、南阿蘇中に来た私には地域の良さやそこに暮らす人々の良さ、みなさん中学生の良さが新鮮なものとして伝わっています。みずみずしい感性を持っていると思います。南阿蘇は「水の生まれる里」であり、広報誌に載っているように「ただのいなかじゃーなかよ」です。

以下熊本県のホームページ（https://www.pref.kumamoto.jp/kiji_32467.html）に掲載してあったものを紹介します。

※ 裏面には「ざぶん賞」の過去の作品を載せています。

応募件名	募集作品	応募締切日
「心の輪を広げる体験作文」及び「障害者週間ポスター」等の募集	作文又はポスター	令和2年9月2日（水）
「ざぶん賞 2020（第19回）」の作品募集	水に関係した内容の作文・童話・詩・手紙	令和2年9月7日（月）
「河川愛護月間」作品募集	絵手紙	令和2年9月30日（水）
「土木の日」作品募集	絵画・写真コンクール	令和2年9月30日（水）

他にもたくさんの応募があります。その都度、担当の先生方からお知らせがあります。

「だれだって いつだって 感染しうるから」再度、実践強化を

熊本県でも新型コロナウイルス感染者が7月26日(日)から急激に増加しています。学校では留意することを「チェック表」で確認し、再び、臨時休校にならないように生徒と先生方で取り組んでいます。ご家庭でもお子様と一緒に、自分と自分の大切な人を守るために、ここでもう一度、感染症対策ができているか確認されてください。子どもたちがご家庭に「チェック表」を持って帰りますので、「チェック表」の最後に確認のサインをお願いします。その後、担任に返却されてください。

○家庭へのお願い

- ①発熱、風邪症状、倦怠感、息苦しさ等を学校で確認した場合は、安全に帰宅させ、症状がなくなるまでは自宅休養になります。すぐに連絡のとれる緊急時連絡先を担当にお知らせください（担任がお尋ねするかもしれません）。
- ②次の症状がある場合は、熊本県新型コロナウイルス感染症専用相談窓口（096-300-5909）か阿蘇保健所（0967-24-9030）に相談されてください。
 - ・息苦しさ（呼吸困難）、強いだるさ（倦怠感）、高熱等の強い症状がある場合
 - ・発熱や咳など比較的軽い症状が続く場合（4日以上は必ず）
 - ・基礎疾患があり、発熱や咳などの比較的軽い風邪の症状がある場合
- ③保健所等に相談したことや、病院の診断結果は学校（担任）に連絡してください。
- ④県内で感染者が急増していますので、当分の間、不要不急の外出はお控えください。また、家族以外での人が多く集まる場所での飲食等はできるだけお避けください。ご協力をよろしくお願いいたします。

ぼくと風呂 阿部 豊

今日も僕は風呂に入る。風呂に入りながら、いつも僕は考えごとをする。今読んでいる本の結末はどうなるのか、学校でんだこと、友達と話したこと、その日心が動かれたこと。風呂は僕にとって、自分の心を振り返り、リラックスする場所だ。

今は、こんなにリラックスできる場所だ。風呂に二人で入り始めた小学生の頃、風呂は肝試しの場所だった。髪を洗っている時は、鏡に幽霊が映っていたらどうしようと常に恐怖と向き合っていた。おびえながらタオルで顔をふき、何もいないと分かるまで、心臓がばくばくしていたのを思い出す。もったいない頃、風呂は最高の遊び場だった。魚のおもちゃを泳がせ、つり遊びをした風呂が大きな海になり、港になり、僕は、最高の一本釣り師だった。

風呂は、僕の想像を広げる場所だった。いろいろな物語や僕だけが知るキャラクターが生まれた。風呂は、修行の場所でもあった。僕は、ずっともぐることができなかった。小学一年生の水泳記録会は、ビート板にしがみつき、みんなからかなり遅れて、バタ足も何とかゴールにたどりついた。その日から、風呂にもぐり修行が始まった。この修行は、辛かった。プールの授業がある時は、真剣に修行に取り組んだが、冬になると修行を忘れるとすらい、この修行には、三年の月日が流れた。修行のいかにも、結局僕は、スイミングスクールに通わせられることになり、この修行の何倍も早く、長い距離を泳ぐことができるようになった。

風呂が実験室になったこともある。小学一年生の夏の自由研究は、牛乳パックで作った船を長く進ませるにはどうしたらよいかを実験した。ストロウオチで時間を計り、スクリーンにつけたゴムの巻き方を変えたり、ゴムの数を変えたりと、風呂にもぐりながら科学者のように実験した。この実験は、地区の理科作品展で最優秀賞となる快挙を成した。こんなにいい賞は、この時だけだったが、おかげで僕は、理科の自由研究が好きになり、夏が来る度に、理科の自由研究に取り組んだ。僕の科学の原点は、風呂にある。

おぼれたり、こけたり、頭をぶつけたり、シャワーが思い切り顔にかかったり、つらい時に涙が出てきて、風呂から上がる時に必死に顔を洗ってしまったり。風呂で悲しい思い出もある。しかし、風呂から上がる、湯気と一緒に悲しさをとんでいってしまう気がする。僕は、風呂に助けられ、風呂と共に成長してきた。去年の冬は、風呂の給湯器が壊れた。家族みんなをいやす風呂も時々、機械が悪かったり、疲れたりするのだ。今日も僕は風呂に入る。昨日より成長した自分を感じながら。

水人間 関 稜

町に、「水人間」が現れた。

彼の外見は、人間とはそんなに違わなかった。男も女もいたし、老人も赤坊もいた。違うのは彼の目だった。彼の目は、とても深い青色をしていた。吸い込まれそうな青だった。その煌めきを見る者を魅了し、その深さは見る者を不安させた。彼らがどこからやって来たのかは分からない。いのまに町にいて、いつのまにか職を得て、いつのまにか暮らしていた。

そのこともあって、町の人々は水人間を敬遠していた。水人間は町はずれに住んでいたし、むこうから積極的に関わろうと持ていさしてはいなかった。ただ黙々と仕事をし、町はずれの家に帰る。彼らの生活はその繰り返しだった。町はずれには湖があった。町の人は、水人間はそこら現れたのだと噂した。町はずれには湖があった。町の人は、水人間はそこら現れたのだと噂した。月日がたつにつれ、水人間たちに対する風当たりは強くなっていった。中には水人間を強く嫌悪する一派も出てきた。

水人間を嫌悪する人々は、無視する、仕事を回さない、などありあらゆる嫌がらせをした。しかし水人間達は顔色一つ変えなかつたので、そのことが余計に町の人々を苛んだ。そして、ある夜、何人かの人影が町はずれの水人間達の住居場所に入っていた。しばらくすると炎が上がり、人影は走り去っていった。町の人々はそれを見て、たまたま見ていただけだった。翌日、町の人々は水人間達の住居を見に行った。それがある程度広がったし、入ろうとする者がいなかった。終わったのはたまたま。水人間達はいなかった。消え失せたのだ。

町の人々は得た知れない隣人がいなくなったことをうれしく思いつつながら帰路に着いた。だが、かが叫んだ。湖のほとりには、たくさんの水人間が立っていた。彼の体はぼんやりと青く光り、湖も同じ色に輝いていた。水人間達は町の人々を見つめながら、無表情で「入らず湖に飛込んだ」とぼん、とぼん、とぼん、とぼん、町の人々は動けなかった。最後の水人間が飛び込んだとき、水が渦を巻きはじめた。人々は走り出した。恐怖の叫び声をあげて、しかしもう遅い。水が町を呑み込んだ。なすすべもなかった。町の人々は、今まさに呑まれようとしているとき、自分を見つめる青い煌めきを見た。思った。

百年後の田んぼ 小 柳 清香

ぶしゅう、と音がしてバスの扉が開いた。

冷房が効いたバスから出ると、むっとするような空気と草いきれが手足にまとわりつく。ぶしゅうと扉が閉まり、バスは砂ぼこりを立てながら行ってしまった。

祖母の家に来たのは久しぶりで、見渡すかぎり緑で埋めつくされた景色が壮大で新鮮だった。私の家の近くにも田んぼはあるけれど、こんなに広くないし山や森もない。真夏の生ぬるい風が青い稲を波立たせて過ぎるから田んぼは海のように見えた。

祖母は昔風の大きな家に住んでいて、私たち家族をここに笑って出迎えてくれた。昔とそんなに変わっていないかった。

「田んぼ、すごいねえ」

と夕食の時に私が言うと、祖母は稲の育て方や面倒の見方を教えてくれた。田んぼはずっと昔から、祖先から受けついできたものでずーっと同じところで毎年米を作るそう。何百年も使っているから土がたまつて、水を入れても土に染みずじまららしい。何百年も前の人と同じことをして、同じ景色を見ることが私は感動した。そして今から何百年後に、やっぱり同じように米を育て、同じようにこの景色を見て感動している誰かのことを想像して不思議な気持ちになった。

その二日後のことだ。祖母の家の飼い犬を、父と一緒に散歩させていた。空は曇っていて一層蒸し暑い。

「あれ？ あそこ、何しているの？」

一面緑の稲の海に、ぼつりと場違いな黄色いショベルカーがあった。そのある田んぼは穴があいたように土色だった。

「あれは、田んぼをよめちやつたんじゃないかな」

父の言っていることがよくわからなかった。私には「どういうこと？」と聞き返す。

「おばあちゃん、何百年も米を作っているから田んぼになるって言っただろう。逆に二、三年作らなかつただけで田んぼはもとの土に戻ってしまうんだよ」

それを聞いてショックだった。たぶん江戸時代だったら、田んぼがあるのは当たり前だった。でも今は保つことも難しくなっている。今の時代はパンも麺もある。それらはとてもおいしいけど大好きでも、この水田の景色はなくなってしまうのだろうか。初夏は水をたたえた田が広々と空を映し、夏には緑の海となる。とんぼが飛び、蛙が泳ぎ、たくさんさんの命を育んでくれる私たちのふるさと、永遠に失われてしまうのだろうか。

私はこの水田の景色が好きだ。一面の緑と自然に囲まれて暮らし祖母を見ると、どんなに街の道路やビルや排気ガスの中で生きていても、やはり、人が心を落ち着かせ本来の姿を取り戻すのはここなんだと感じる。だから私は何十年後もこの景色を見たい。

何百年後、ここに立つ誰かが見ているのは一面の田んぼだろうか。それとも……。

中学1年生の作品です。
※重ねた経験のとらえ方が素敵です。
プロの方々が装飾しアート作品に仕上げられます。



中学2年生の作品です。
※独創的な作品づくり、読者を惹きつけます。
プロの方々が装飾しアート作品に仕上げられます。



中学2年生の作品です。
※体験を通して考えた未来への想いが伝わってきます。
プロの方々が装飾しアート作品に仕上げられます。

